

# オーギュスト・コントの「歴史的方法」

——「自然分類」から「社会階級」へ——

平井 正人

本論文では、社会学の創始者として知られるオーギュスト・コントが、自らの「先駆者」として位置づけたニコラ・ド・コンドルセの『人間精神進歩の歴史表の素描』を乗り越えるため、社会学に固有の方法として明示している「歴史的方法」とはいかなる方法であるかを、18世紀の博物学者たちが編み出した「自然的方法」との関連に着目することによって明らかにする。コンドルセが博物学者たちの「自然的方法」を無視したことを批判したコントは、その基本的な考え方を「社会現象」にも適用すべきだと考えた。それによって生まれたのが「歴史的方法」であり、それを適用することによって得られたのが、動物学者が「自然的方法」によって構築する「動物系列」に類比的な「社会系列」である。コントの「歴史的方法」とは、18世紀まで支配的だった「分類理性」の産物であり、その原理を徹底させることの危険性は、コントの性差別主義に如実に現れていると言える。

## 1 はじめに

本論文が目指すのは、社会学の創始者として知られるコント (Auguste Comte, 1798–1857) が、自らの「先駆者」として位置づけたコンドルセ (Marie Jean Antoine Nicolas de Caritat, marquis de Condorcet, 1743–94) の『人間精神進歩の歴史表の素描』を乗り越えるため、1822年の「社会を再組織するために必要な科学的研究の趣意書」で示唆し、1839年の『実証哲学講義』第48講で「社会学」に固有の方法として明示している、「歴史的方法」とはいかなる方法であるかを、博物学者たちが編み出し、コント自身も『講義』第42講「生物分類哲学についての一般的考察」の中で論じている、「自然的方法」との関連に着目することによって明らかにすることである。

コントの「歴史的方法」は、デュルケーム (Émile Durkheim, 1858–1917) が『社会学的方法の規準』で言及して以来 (Durkheim 1895=2018)、社会学史にその名を留めているものの、コント研究者を除けば、その内実は十分に理解されているとは言えない。また、この「方法」は彼のコンドルセ批判 (とりわけ、コントはコンドルセが博物学者たちの「分類の一般的方法」を無視したことを批判している) に端を発しているにもかかわらず、コントとコンドルセの関係を論じた先行研究では、その点が見逃されてきた (Macherey 2013; Muglioni 1995; Petit 1989; 北垣 2011)。そこで本論文では、コントのコンドルセ論から「歴史的方法」がいかに生まれ、その結果いかなる「社会学」が作られたのかを論じる。

## 2 なぜコンドルセは失敗したのか？

1819年の「コンドルセの政治的研究について」は、パリに所在のオーギュスト・コント記念館に保存されている「社会科学と実証政治についての断片」と題された34葉に含まれる、12葉からなる手稿であり、「序論」、「構想について」、「区分について」、「執行について」、「結

論」で構成される (Comte [1819] 1970: 481-9)。そこに綴られた考察は、コントの忠実な弟子たちが 1822 年の『西洋評論』の一部として印刷するまで日の目を見なかったが、1822 年の「社会を再組織するために必要な科学的研究の趣意書」の中でコントが展開するコンドルセ論の習作と見なすことができる。ここでは、とりわけ「区分について」と題された第二節 (Comte [1819] 1970: 486-7) に注目しなければならない。なぜなら、コントから見て、『人間精神進歩の歴史表の素描』の中で採用された「時代区分」こそが、これまでの研究では十分に強調されてこなかったが、コンドルセが「政治を観察科学の地位にまで高めようとする研究の一般的構想」を実現できなかった主たる原因だからである。結論を先取りすれば、コンドルセの「時代区分」は、1822 年の「趣意書」で明言されるように、博物学者 (つまり、植物学者と動物学者) が編み出した「分類の一般的方法」に従わなかったのである。

それに先だって、「序論」と「構想について」を概観しよう (Comte [1819] 1970: 483-6)。そうすれば、コントがコンドルセのどの点を評価していたかが明確になるだろう。それによれば、同年の「生理学や他のいくつかの科学によって社会科学を基礎づけるために行われてきた試みについての考察」で論じられているように (Comte [1819] 1970: 473-82)、政治を他の何らかの「科学」から「派生」させようとした人々 (具体的には、カバニスとトラシー) とは異なり、政治を「それ〔政治〕特有の事実」によって基礎づけようとしたコンドルセは、「人間精神と文明の一般的な歩み」を観察することを通じて、それらを支配する「人間精神進歩の一般法則」を発見しようとした<sup>1</sup>。それこそが、「社会機械の全運動」の「制御装置」であり、「文明化の力」である。したがって、人間精神が「その道のどの地点にいて、どこに向かっているかを明確に知る」ことを必要とする政治家の仕事は、「盲目的因習」に従うことをやめるためには、「それ〔力〕に逆らうのではなく、その影響を助けること、その作用に光を当てること、その良い結果を早めること、それが政治機械に生じさせる摩擦を可能な限り防ぐこと」に限定されなければならない。このような政治観を抱いたがゆえに、「コンドルセはすべての政治評論家とすべての哲学者の上に立った」と、コントはコンドルセを絶賛するわけである。

だが、コントによれば、コンドルセの計画は失敗に終わった。「彼の精神は、この大きな一歩を踏み出したことで疲れてしまい、非常に欠陥の多い素描しか生み出さなかったことから……この企てにコンドルセは完全に失敗したと見なすことができる」。そう断言する理由として、1822 年の「趣意書」で述べられるように、コントは「この決定的発見」が「いまだにほとんど全く人の耳目を引いていない」こと、「誰一人としてコンドルセが示した方針に沿って歩もうとしない」こと、「要するに、政治が全く実証的になっていない」ことを挙げている (Comte [1824] 2020: 120)。この箇所からもわかるように、コントがある科学を「実証的」と認めるかどうかの試金石とするのは、ある「科学」が単に「観察」に基づいているかどうかのみならず、それが一つの「学派」を持続的に形成しているかどうかなのだ<sup>2</sup>。この観察可能な「事実」から出発して、コントは「実証性」の条件を定義しようとする。逆に言えば、その名を冠する学派が現実に存在しない以上、コントの考えでは、コンドルセは「その〔仕事の〕最も本質的な条件を全面的に無視してしまった」と逆算しなければならない。

では、政治を「それ〔政治〕特有の事実」によって基礎づけることに加えて、いかなる条件を満たせば、コンドルセの構想を実現できるだろうか。コントの見立てでは、コンドルセがしくじったのは、「著作において立てるべき区分の選択」(Comte [1819] 1970: 486)、要するに、章立てである。今日から見れば意外なことに、コントは著作の区分と現実のそれが可能な限り正確に対応していなければならないと考えていた。その背景にあるのが、1822年の『趣意書』で明確化されるように(Comte [1824] 2020: 121)、18世紀の博物学者たちが考案した「分類の一般的方法」、具体的には、リンネの「人為的方法」(la méthode artificielle)に對比される、カンドルの「自然的方法」(la méthode naturelle)である(Daudin 1983; Drouin 1994)。前者が植物の名を同定するのに便利な形質を分類の基礎に据えるのに対して、後者は自然の秩序を正確に模写しようとする。「この方法の基本原則が確立されたのは、植物学と動物学において、哲学的な分類が存在し始めてからである。すなわち、人為的関連(des rapprochements factices)によってではなく、現実的関係(des rapports réels)によって基礎づけられた分類である<sup>3</sup>」(Comte [1824] 2020: 121)。このように、コンドルセの「歴史」を書き換える手段をコントに与えたのは、ありとあらゆる生物を(人為的ではなく)「自然の秩序」に合致した仕方でも分類することを目指す、博物学(histoire naturelle)だった。同様の考えに基づき、コントは文明史の各時代を分類・配列しようとしたのだ。

周知の通り、コンドルセの『素描』は十章からなり、その章立ては彼の時代区分に対応している(Condorcet 1794=1951)。だが、コントいわく、「コンドルセが採用した配列は完全に間違っている。というのもそれは諸条件の中でも最も確かなもの、すなわち、同質的な系列を提示するというものさえ満たしていないからである」(Comte [1824] 2020: 120)。実際に、彼は「ある時は産業的な、ある時は科学的な、ある時は政治的な、一つの特筆すべき出来事を、各時代の起源として、ほとんど偶然に任せて取り上げれば、諸々の事実を適切に配列できると信じたのだ」(Comte [1824] 2020: 120)。しかし、「文明の様々な時代は、コンドルセが行ったように、大なり小なり重要な出来事に基づいて無秩序に配列されるのではなく、すべての科学者たちがあらゆる分類を支配すべきものとしてすでに認めている哲学的原理〔すなわち、分類の基本原則〕に基づいて配列されなければならない」(Comte [1824] 2020: 122)。このように、コントによれば、コンドルセは「文明の様々な時代をそれらの自然的関係に従って人類の一般史の中に配列するための動機は、動植物の身体構造を同じ法則に基づいて並べるための博物学者たちのものと全く同様である」(Comte [1824] 2020: 121)ことを考慮しなかった。

では、どうすればそのような「自然的関係」を捉え、「一端から他端まで筋の通った、連続かつ連結した一連の観察を著作の中で確立すること」(Comte [1819] 1970: 487)ができるだろうか。換言すれば、「人間精神進歩の歴史表」を貫くべき「同質的な系列」とは何なのか。この問いに対するコントの答えは、1819年の手稿によれば、「その〔歴史表の〕時代を最も重要な観念体系、つまり、道徳的・政治的な観念体系の歴史に合わせて配列すること」(Comte [1819] 1970: 486)である。なぜ「道徳的・政治的な観念体系」が最重要と見なされるかに関する説明はなされておらず、コントがそのように考えた根拠自体を思想的に検討すること

が必要であるが、「人間精神進歩の歴史表」では、コントによれば、「道徳的・政治的な観念体系の歴史」こそが「木の幹」であり、「他の観念体系に関する考察」は、その「枝」として見なすべきであると主張されている。この考えの背景にあるのは、「自然的方法」において遵守すべき条件の一つである、「形質従属の原理」だと考えられる (Drouin 1994: 156)。それによれば、「様々な分類形質は、数えられるだけではなく、それらの間に存在するはずの一定の基本的従属の規則に従って、いわば考量されなければならない」。要するに、様々な形質の重要性には軽重があるため、「最初にこれらの支配的器官に基づく分類、次により重要度が低いものに基づく二次区分」を行うべきなのだ (Candolle 1813: 73)。コントは「道徳的・政治的な観念体系」を最重要の「形質」と解したわけである。

このことを踏まえると、なぜコントが、1822年の『趣意書』において、コンドルセの時代区分を批判した直後に、いわゆる「三状態の法則」を論じ始めるのかが理解できる。「形質従属の原理」に従うならば、「時代の主要区分が提示するのは文明史の最も一般的な概観でなければならない。下位区分が次々に提供するものは、それらをどの程度まで推し進めるのが適切だと判断されようとも、この同じ歴史のだんだんと詳細になる概観でなければならない」(Comte [1824] 2020: 122)。それゆえ、「最も重要な種類の観念体系に起こった決定的変化を諸々の時代の出発点にする」(Comte [1819] 1970: 487) ことができれば、「過去の主要区分」(Comte [1824] 2020: 123) が得られるはずである。他の観念体系が役立つのは、その「下位区分」を考える時のみである。そして、「人間精神進歩の歴史表」を作る上で最も重要な「形質」とは、1819年の手稿によれば、「道徳的・政治的な観念体系」であった。では、「道徳的・政治的な観念体系」に起こった——いやむしろ、これから起こるべき——「決定的変化」とは何か。それこそが、コントによれば、「我々の知識の各分野」における、「神学的ないし想像的状态」から「形而上学的ないし抽象的状态」への、「形而上学的ないし抽象的状态」から「科学的ないし実証的状态」への移行なのである (Comte [1824] 2020: 75)。

こうしてコントは、博物学者たちの「分類の一般的方法」を参照していなかったがゆえにコンドルセには捉えることができなかった、「人間精神進歩の法則」を発見したと考えた。それは、単に過去を秩序付けるだけでなく、コンドルセの「大胆な構想」が目指していたように、「未来の展望」(Comte [1824] 2020: 130) を描くことさえも可能にする。というのも、「現象の観察に基づいて確立された法則は、それらの継起を予見するために、一般に利用される」(Comte [1824] 2020: 131) のと同様に、コントによれば、「良く配列された過去の助けを借りれば、実際に、確信を持って社会の未来像を決定できる」(Comte [1824] 2020: 130) からである。「実証政治の精神」は、単なる過去の認識にとどまらず、社会が進むべき道を照らし出す「人間精神進歩の法則」に基づき、政治家が今なすべきことは何かを指し示すことにある。政治家が時代の流れに逆らおうとすれば、「社会機械」——あるいは、「社会有機体」——は不調をきたすだろう。「文明の歩みが人類のエリートに今日において要請する社会システムの決定、実証政治の真の実践的目標となる決定は、過去から導き出されるような、間近に迫った社会の未来を一般に決定することに他ならない」(Comte [1824] 2020: 131)。

### 3 博物学者たちの「自然的方法」

このようにコントは、「あらゆる科学者の中で最も広範かつ最も困難な分類を形成しなければならぬ人々」、すなわち、「博物学者たち」が編み出した「分類の一般的方法」を、「動植物の身体構造」のみならず、「文明史」にも適用することで、「コンドルセをやり直す」(Bourdeau 2020: 16–8) ことを試みた。「形質従属の原理」に基づき、「道徳的・政治的な観念体系の歴史」に起こった「決定的変化」に着目することで「発見」されたのが、かの有名な「三状態の法則」である。その「時代区分」に基づく著作は、コントとサン＝シモンの間で交わされた契約書によれば (Pickering 1993: 229)、『文明進歩の歴史表の素描』と題されるはずだった。それは未完に終わったとはいえ、『実証哲学講義』のおよそ三分の一を占める「歴史編」をその等価物と見なすことができる。この着想をコントに与えたと考えられるのが、1808年にモンペリエ大学医学部に植物学教授として着任したオーギュスタン・ピラミュ・ド・カンドルである。哲学史家グイエが指摘するように (Gouhier 1933: 179–80)、1814年にパリに発つまでモンペリエで過ごしていたコントは、カンドルと知り合いであった可能性が高い。その傍証として、コントがカンドルに1824年の『実証政治体系』を寄贈したという事実が挙げられる (Gouhier 1933: 179; Pickering 1993: 246)。

より具体的に言えば、「コンドルセをやり直す」ためにコントが依拠したと考えられるのが、リンネが1751年の『植物哲学』で構想し、アダンソンが1763年の『植物の科』で、ジュシューが1789年の『植物の属』で、それぞれ独自の仕方で開催し、カンドルが1813年の『植物学の基礎理論』(その第二版が、グイエが指摘するように、コントの個人蔵書に含まれている)で体系化した、「自然的方法」(la méthode naturelle)である (Gouhier 1933: 180)。コントの「歴史的方法」(la méthode historique)とは、端的に言えば、博物学者たちが「自然的方法」と呼んでいたものを、コントが社会現象向けにアレンジしたものに他ならない。したがって、博物学者たちの「自然的方法」の要点——あるいは、少なくとも、コント自身が考えるそれ——を押さえておかなければ、コントの「歴史的方法」を理解することはできないだろう。そこで本節では、『実証哲学講義』第42講「生物分類哲学についての一般的考察」(Comte 1838=1998: 767–794)を中心に、コント自身が「自然的方法」をどのように理解していたのか、また、その結果得られる「生物系列」(la série biologique)とは何であるかを検討することで、コントの「歴史的方法」とは何かを論じるための下準備を行うことにしたい。

それに先立って、コントの「生物哲学」の中で「自然的方法」がいかなる位置を占めているのかを確認しておこう。『講義』第2講で論じられるように (Comte 1838=1998: 44–50)、「人類のあらゆる種類の仕事の総体」は、コントによれば、「狭義の科学」と「技術」に大別され、前者はさらに「抽象科学」と「具体科学」に分けられる。この区分をとりわけ生命現象に適用すると、第40講で示されるように (Comte 1838=1998: 740–6)、「生物学」(la biologie)は「抽象科学」に、「自然史」(l'histoire naturelle)と「病理学」(la pathologie)は「具体科学」に、「教育術」(l'art de l'éducation)と「医術」(l'art médical)は「技術」に対応する。「生物学」はさらに三つに分割され、「解剖学」(l'anatomie)が「身体組織」(l'organisation)を、「生理学」(la physiologie)が「生命活動」(la vie)を、「生物分類学」(la biotaxie)が「分類」(la

classification) を研究する。「自然的方法」が扱われるのは、それをあらゆる動植物に適用することで「生物の真の普遍的ヒエラルキー」を構築することを目的とする、「生物分類学」においてである。さらに言えば、コントが「狭義の比較」と呼ぶ方法に含まれる三つの観点——第一に、同一有機体の様々な部分間の比較、第二に、様々な発達段階間の比較、第三に、生物ヒエラルキーの様々な階層間の比較——のうち、「自然的方法」は最後者に対応すると言えるだろう (Comte 1838=1998: 698–707)。

コントによれば、「狭義の自然的方法の基本理論」を構成するのは、「自然群」と「生物ヒエラルキー」という、「二つの大いなる哲学的概念」である。第一に、「自然群の形成」とは、「ある同一のカテゴリーに属する存在者たちが、それらの特徴的差異にもかかわらず、それ〔カテゴリー〕に属していないもの〔存在者たち〕のいずれよりも、それら〔存在者たち〕の間で現実には常により類似するような、そういった一群の本質的類似性を、程度の差はあれ多くの種の間で、把握することにある」(Comte 1838=1998: 771)。カンドルが『植物学の基礎理論』で説明しているように (Candolle 1813: 155–6)、分類の出発点は個体 (individu) の観察にあり、個体間に見いだされる類似性をカテゴリー化したものが種 (espèce) である。そして、種同士の類似性を属 (genre)、属同士の類似性を科 (famille)、科同士の類似性を綱 (classe) というように、ボトムアップ式に上位のカテゴリーを形成していく。種を一次抽象と呼ぶならば、属は二次抽象、科は三次抽象、綱は四次抽象と呼ぶことができるだろう。そして、後者に進むにつれ具体性は捨象されていき、結果として一般性が増していく。コントは同様の考え方を年代記にも適用し、個人の伝記から出発して、地方や都市、様々な国民を経て、人類へと上昇すべきだとする (Comte [1824] 2020: 153)。

第二に、「生物ヒエラルキー」は、そのようにして形成されたカテゴリーを、一定の規則に従って、一列に並べることを意味する。その規則とは、「生物種の総体が一列に並ぶことで、それら〔生物種〕の中のいずれかが、それ〔生物種〕に先行するすべてのもの〔生物種〕よりも常に劣り、それ〔生物種〕に後続するすべてのもの〔生物種〕よりも常に優れたものになる」(Comte 1838=1998: 774) ように、解剖学的観点と生理学的観点の整合性を保ちつつ、様々な生物種を並べることである。一方では、解剖学的には、「動物種は……それらの解剖学的要素〔組織〕の多様性、多数性、特殊性に関してであれ、それら〔動物種〕の器官と器官系の徐々に増大する複雑性と多様性に関してであれ、器質的複雑性が常に増大する」(Comte 1838=1998: 773)。他方では、生理学的には、「この基本的順序は……より多数で、より多様で、より明確に定義された機能で構成される、常により複雑かつより活発な生命活動に、正確に対応している」(Comte 1838=1998: 773)。そうして得られた「一連のタブロー」は、「分類全体が各有機体に与える単なる位置が、それに先行するすべてのもの、あるいは後続するすべてのものに対して、その真の解剖学的本性と生理学的本性の全体を即座に浮き彫りにする自発的傾向を持つ」(Comte 1838=1998: 773) ことになるだろう。

以上の考え方に基づき、コントは「自然的方法」を適用することで、いかなる「生物ヒエラルキー」が構築されてきたかを、第 42 講の後半部分 (第 29 段落～第 43 段落) で、ごく簡潔に示している (Comte 1838=1998: 784–94)。コントは「有機的世界」を「植物界」と「動

物界」に分割した後、ブランヴィルの分類に依拠しつつ (Lessertisseur et Jouffroy 1979; Appel 1980)、後者をさらに下位区分していく。第一に、「動物界」は、「動物被膜の一般的形状」が対称的か否かに応じて、「対称動物」と「無定形動物」に、第二に、「対称動物」は、その対称性が点対称か線対称かに応じて、「相称動物」と「放射動物」に、第三に、「相称動物」は、その被膜が硬いか柔らかいかに応じて、「体節動物」と「無体節動物」(軟体動物)に、第四に、「体節動物」は、その体節が内的か外的かに応じて、「骨動物」(狭義の脊椎動物)と「昆虫動物」(節足動物)に、そして最後に、「骨動物」は、「皮膚表面が、毛、羽、鱗で覆われているか、剥き出しであるか」という単純な考察」に基づき、哺乳類、鳥類、爬虫類、両生類、魚類に分けられる。この「動物ヒエラルキー」にジュシューが採用した「植物界」の下位区分(双子葉類、単子葉類、無子葉類)を統合したものを、コントは「生物ヒエラルキー」(あるいは、「生物系列」と呼んでいるわけである。

この「動物階梯」の頂点に位置づけられるのが、かつては「天使たちの中でも最も下等なもの」と見なされていたが、いまや「動物たちの中でも最も高等なもの」と特徴づけられることになった「人間」である (Comte 1842=1975: 673)。というのも、「動物ヒエラルキー」は、コントがジュシューから援用した表現を用いれば、「動物的尊厳」(*la dignité animale*) が徐々に高まるように (Comte 1838=1998: 785)、つまり、「動物ヒエラルキー」の下層近くに配置される有機体ほど、「植物的生」(吸収と排出)が支配的であるが、より上の階層に位置づけられるにつれて、有機体の「動物的生」(運動と感覚)がより高度になっていくように配置されるからである。このように考えると、「人間」とは「動物性の主たる座である神経系」が最も複雑化した生物種であり、『講義』第45講で論じられるように、「大脳の、最も発達の余地のある (*la moins développée*<sup>4</sup>)、最も前方に位置する部分には、人間性 (*l'humanité*) の最も特徴的な能力が、最もボリュームがあり、最も後方に位置する部分には、あらゆる動物性 (*l'animalité*) の共通土台を特に構成するものが、常に割り当てられる」(Comte 1838=1998: 866)。このようにコントは、「人間」の大脳と、そのすぐ下の階層に配置される、「大型の猿」の大脳の差分を取った上で、前者にのみ存在する部分を「人間性」の座と見なした。

実を言えば、コントにとって「自然的方法」とは、『講義』第2講において、彼が「科学ヒエラルキー」を構築する際に適用したのと同じ「分類の一般理論」の応用例の一つにすぎない (Comte 1838=1998: 44)。しかし、この「任意のヒエラルキーの基本法則」は、「思想と現象の領域から存在者そのものの現実的領域へと移行することで」(Comte 1842=1975: 672)、もはや「単純な分類手段」であることを止め、「実在する存在者の真の関係についての現実的知識の重要な体系」を表現するようになる (Comte 1838=1998: 793)。つまり、「自然的方法」が確立する「タブロー」は、単なる道具ではなく、博物学者たちの信じるところによれば、自然の秩序そのものを映し出す鏡である。同じ原理を「文明史」に適用すれば、1822年の「趣意書」でも明言されていたように、「人為的関連」ではなく、「現実的關係」に基づく「時代区分」を浮き彫りにできるだろう。それは、「自然的方法」が自然の秩序を映し出すように、歴史の秩序に対応しているはずである。だが、コントが「分類の一般理論」を適用するのは「文明史」だけではない。彼は、第57講で詳述されるように (Comte 1842=1975: 673)、「動

物階梯 (échelle animale) の自発的延長」として「社会ヒエラルキー」を構築する。つまり、社会が最終的にいかなる「階級」(classe) で構築されるべきかが「分類」されるのだ。

#### 4 コントの「歴史的方法」

前節では、コントが「自然的方法」をどのように理解していたのかを概観した。それが必要だったのは、第 48 講で明確化されるように (Comte 1839=1975: 148)、コントが「歴史的方法」と呼んでいるものは、「生物学」が発達させてきた「狭義の比較法」の一種として、何よりもまず特徴づけられるからである。それゆえ、博物学者たちが編み出し、「人間精神進歩の法則」を発見するために、1822 年の「趣意書」において、コントが援用した「自然的方法」の基本的な考え方を押さえておかなければ、彼の「歴史的方法」を、ひいては、彼の「社会学」を理解することは不可能であろう。事実、「社会学の本性と目的に合致した……様々な基本的手段の総体の合理的評価」(第 48 講・第 42 段落～第 61 段落)の中でも、「純粋な観察」(第 45 段落～第 47 段落)、「狭義の実験」(第 48 段落)、「狭義の比較法」(第 49 段落～第 53 段落)を論じた後、「比較法の最終部門」として、「狭義の歴史的方法」(第 54 段落～第 61 段落)は導入されている。その特徴は、「人間の出来事全体をそれらの段階的連鎖を明白に示す諸系列に配列する」(Comte 1839=1975: 150) ことにある。それによって得られる「社会系列」(la série sociale) は、コント自身が明言しているように、「動物系列」(la série animale) の「真の等価物」なのだ (Comte 1839=1975: 144; Tresch 2010)。

彼の「社会系列」が意味するのは、「歴史的事実の全体に基づき、物理的であれ、知性的であれ、道徳的であれ、政治的であれ、各傾向が絶えず増大する一方で、相反する傾向が際限なく減退する」(Comte 1839=1975: 151) ように、「人類の相次ぐ様々な状態の歴史的比較」を一列に並べた「一覧表」(tableau) である。それは、第 51 講で示唆されるように、「動物系列のある種の必然的延長」として表象される。「最も高い科学的観点から人類の発達全体を考察すると、それ〔人類の発達〕は、人間性を特徴づける能力を、動物性のそれ〔能力〕と比べて、そしてとりわけ、我々が生物界全体と共有する能力〔植物性〕に比して、だんだんと際立たせることに本質的に存する」(Comte 1842=1975: 673)。ただし、「歴史的方法」が系列化するのには、「生物ヒエラルキーの様々な階層間の比較」を行う「自然的方法」とは異なり、「個体発達」に類比的な、「社会発達」の各段階である。その意味で、「歴史的方法」は「年齢の生物学的比較」を「その哲学的源泉」としているとはいえ、「その真の等価物」は「基本的な有機的系列の発想」である (Comte 1839=1975: 154)。要するに、一個の有機体として把握された「人類」の各発達段階のスナップ・ショットを、「動物系列」と同じ発想に基づき、一定の規則に従って並べるわけである。

コントの「社会系列」の各項は、それゆえ、「単なる植物と最も取るに足りない動物から、最も複雑な相称動物まで次々に經由して、それから鳥類や哺乳類にまで上り詰め、そしてこれら〔哺乳類〕においては肉食動物と猿に向けて段階的に上昇する、生物界全体を通じて間断なく連続した、ある一般的系列の最終段階」(Comte 1839=1975: 202-3) と見なされる以上、「純粋な植物的機能の必然的優位は、至る所でだんだんと目立たなくなるのに対して、狭

義の動物的功能の発達、主として知的・道徳的功能のそれが、だんだんと支配的になる傾向を持つ」(Comte 1839=1975: 203) ように配列される。その意味で、「文明化」とは、「物理的欲求の支配力を絶えず減退させ、様々な社会本能をますます刺激することによってであれ、知的機能の活動を——最も高度なもの〔機能〕さえも——絶えず刺激し、理性が人間の行動に及ぼす習慣的影響を自発的に増大させることによってであれ、我々の最も卓越した能力を、徐々に訓練することによって、発達させること」(Comte 1839=1975: 204) である。要するに、「動物性」の座である「脊髄部分」の支配力を相対的に弱め、「人間性」の座である「前頭部分」を活性化させるのだ(Comte 1839=1975: 204)。「人間進歩」とは、コントにとって、他の動物と比較して、人間を人間たらしめる能力を開花させることに他ならない。

ただし、「人間性」は、「植物性」や「動物性」とは異なり、人類の「幼年期」には眠った状態にあり、それを目覚めさせるには、「適切な訓練」が不可欠である。「社会発達」は、「動物性に比した人間性の本質的属性をだんだんと優位にする傾向を持ち、他のすべて〔能力〕を指導することを明白な使命とする能力〔知性〕の支配を継続する限りにおいて、全く「自然的」であると判断されなければならない」(Comte 1839=1975: 204) とはいえ、「我々の様々な能力を適切に訓練することで、それぞれ〔の能力〕は当初はさほど活発ではないだけに、それら〔機能〕の一つひとつがよりいっそう影響力を増す」という意味で、「人為的」でもある。「そこから直接導かれるのが、我々の人間性と我々の動物性の永遠かつ不可欠な戦いの科学的説明である」(Comte 1839=1975: 204)。このように、デュルケームが「ホモ・デュプレックス」と表現することになる人間の二元性(Durkheim 1914: 314-32)は、コントの考えでは、「大脳生理学」によって説明される。コントの「人類史」は、「人類」という主人公が、自らの「動物性」をコントロールする術を学ぶ一方で、自らの「人間性」を開花させていく、長大な自己形成物語(Bildungsroman)に譬えることができるだろう。

その「主要区分」は、1822年に「三状態の法則」という形で提示されていたが、その「下位区分」が論じられるのが、第52講から第57講までの「歴史編」である。ここでは、その「要約」(第57講・第70段落～第78段落)を概観しよう(Comte 1842=1975: 640-52)。第一に、「神学的状態」は、「フェティシズムの時代」、「多神教の時代」、「一神教の時代」に、「フェティシズムの時代」は、「狭義のフェティシズム」と「星辰崇拜」に、「多神教の時代」は、「神政多神教」(エジプト型)と「軍事多神教」(ギリシア型とローマ型)に、「一神教の時代」は、「中世の第一段階」(5世紀～7世紀)、「中世の第二段階」(8世紀～10世紀)、「中世の第三段階」(11世紀～13世紀)に分けられる。第二に、「形而上学的状態」と「実証的状态」——それらは、一方は旧体制の「分解」を、他方は新体制の「再合成」を、同時に進めることから、「近代の二重運動」と呼ばれる——は、「近代の第一段階」(14世紀～15世紀)、「近代の第二段階」(16世紀～17世紀半ば)、「近代の第三段階」(17世紀半ば～18世紀)に分けられる。こうして「人類」は、「幼年期」から「壮年期」に近づくにつれて、「想像力よりも理性が、戦争的活動よりも平和的活動が優位になる」(Comte 1842=1975: 640) ように、その「年齢」を重ねることになる。このように、コントの「歴史的方法」とは、博物学者たちの「自然的方法」が様々な生物種を「生物系列」に並べるのと同様に、「人類の相次ぐ様々な

状態の歴史的比較」を通じて、「社会系列」を構築するための手段であった。だが、コントが「ヒエラルキー原理」を適用するのは、「社会発達」の動的秩序にとどまらない。彼は、第57講の末尾（第90段落～第102段落）で、それを「近代社会の最終的構成にふさわしい基礎的配列の真の一般原理」と見なすことで、近代全体を通じて、社会がそこに向かって自己組織化を続けてきたところの「社会ヒエラルキー」の静的秩序も同様に明らかにしているのだ。それは、「狭義の人間性を単なる動物性から区別する様々な本質的属性をだんだんと優位にする恒常的傾向」（Comte 1842=1975: 673）によって特徴づけられる「人間発達」と同様に、「動物階梯（*échelle animale*）の自発的延長」と見なされる。「そこ〔社会ヒエラルキー〕で様々な階級を分離する特徴は、動物性の様々な程度を区別するもの〔特徴〕と、それほど顕著ではないが、本質的に類比的であるはずだ」（Comte 1842=1975: 673）。つまり、「人間性」を最も高い水準で発揮しなければならない階級が上位に配置された後、ヒエラルキーを下るにつれて、各階級の「動物性」が徐々に支配的になるわけである。

コントの「社会ヒエラルキー」は、第56講で言われるように、「最も些細な物質的操作から、美的であれ、科学的であれ、哲学的であれ、最も崇高な思索に至るまでを含む。また、それ〔系列〕を上昇すると、各ジャンルの日常的業務に対応する正常な観点において、一般性と抽象が連続的に増大する」ように、「人間による仕事の全体系が一つの巨大な直線的系列に配列される」一方で、「それ〔系列〕を下降すると、それら〔職業〕の直接的使命がだんだんと複雑化し、それら〔職業〕の日常的活動の有用性が徐々に直接的になるに依りて、様々な職業が逆向きに配列される」（Comte 1842=1975: 486）。それぞれの「階級」は、「自然群」の考えを踏襲し、「様々な活動様式の、それらの現実的類縁性の全体に基づく、規則的なグループ化」（Comte 1842=1975: 487）によって形成される。また、その並べ方は「生物ヒエラルキー」のそれを踏襲している。「これらの様々な階級は、個人的側面から比較すると、人間性を最も特徴づける気高い能力のだんだんと顕著になる優位を、おのずから示すはずである。というのも、習慣的思想の増大する抽象と一般性は、間違いなく、それら〔思想〕の合理的操作をより遠くまで継続するという対応する能力と同様に、人間が他のすべての動物よりも優れていることの主たる徴候だからである」（Comte 1842=1975: 486）。

このようにコントは、「自然的方法」と「歴史的方法」に通底する「ヒエラルキー原理」を「人類の最終的体制」にも適用することで、「自然分類」（*la classification naturelle*）を「社会階級」（*le classement social*）に転化する。その全体像は、第57講の後半部分（第90段落～第102段落）で提示されているが、第42講で示された「動物ヒエラルキー」と同様に、次のようにまとめることができる。第一に、「新しい社会的エコノミーの全体」は、「思索的階級」と「活動的階級」に、第二に、「思索的階級」は、「科学的ないし哲学的観点」と「美的観点」に、「活動的階級」は、「狭義の生産」と「生産物の運搬」に、第三に、「狭義の生産」は、「材料の単純な形成」と「それら〔材料〕の直接的加工」に、「生産物の運搬」は、「生産物そのもの」と「それら〔生産物〕の表象記号」に分けられる（Comte 1842=1975: 670-80）。その結果得られるのが、「産業ヒエラルキー」（銀行家、狭義の商人、職人、農家）である。なお、「科学的ないし哲学的観点」には「科学ヒエラルキー」（社会学、生物学、化学、物理学、天文

学、数学)が、「美的観点」には、第53講で論じられるように(Comte 1841=1975: 540)、「美的ヒエラルキー」(詩、音楽、絵画、彫刻、建築)が対応している。こうして、「科学ヒエラルキー」、「美的ヒエラルキー」、「産業ヒエラルキー」が、その活動内容の「抽象度」に応じて、一列に並べられた結果、「社会ヒエラルキー」が得られるわけである。

## 5 結論

本論文では、コントの「歴史的方法」とは何であり、また、それが「社会現象」に適用された結果、彼の「社会学」がどのような特徴を持つことになったのかを明らかにしようと試みた。第一に、1819年の手稿と1822年の「趣意書」を取り上げ、コントが、「コンドルセをやり直す」ためには、博物学者たちが編み出した「分類の一般的方法」を「実証政治」に導入しなければならないと考えるに至った経緯を見た。第二に、コントが理解する「自然的方法」は、『講義』第42講を中心に、「自然群」と「生物ヒエラルキー」という「二つの大いなる哲学的概念」によって特徴づけられることを確認した。以上の議論を踏まえ、第三に、「自然的方法」と同様の考え方を「社会現象」に適用したのが「歴史的方法」であり、コントの「社会学」では、一方では、「社会発達」の動的秩序が、他方では、「社会ヒエラルキー」の静的秩序が、たった一つの「ヒエラルキー原理」によって導き出されていることを示した。このようにコントは、生物界にとどまらず、人間界さえも包括した、巨大な分類体系を作ろうとした。彼の「歴史的方法」を、ひいては「社会学」を根底から支えているのは、トールの表現を借りれば、「分類理性」(Tort 1989)なのである。

そのため、コントが『講義』前半で論じた「自然哲学」を、より正確に言えば、彼が自身の「社会学」を基礎づけるために前提としていた「生物学」、とりわけ「生物分類学」の基本的な考え方を押さえておかなければ、コントの「社会学」を理解することは不可能であろう。コントの「社会学」は、彼自身が一度ならず公言しているように、「実証哲学」の一部にすぎず、彼の社会観は、19世紀前半に流通していた自然科学的世界像と整合的になるように、苦心して形成されたものだったのだ。事実、第59講の末尾で、コントは「社会系列」と「生物系列」を接続することによって、あらゆる「動植物」を含み、「人間」をその頂点に戴くところの「巨大な有機的体系」を構築した後、それを「無機的自然が我々に提供しうる唯一の基礎的系列」と接合する。このように、ブランヴィルの「動物系列」の概念を継承したコントが、彼の『講義』全体を通じて打ち立てようとしたのは、単なる「社会系列」にとどまらず、アペルの巧みな表現を借りれば、「19世紀の存在の連鎖」(Appel 1980)だったのだ。その背景にあったのが、優れた「分類」とは、分類する対象を問わず、その真の「秩序」を映し出す鏡であるという、博物学者たちの信念だった。ミシェル・フーコーは、この時代を博物学(histoire naturelle)が歴史学(histoire)に置き換わるエピステーメーの転換点として位置づけていた(Foucault 1966=1974)。フーコーが「古典主義」と呼ぶ時代のエピステーメーを色濃く反映したコントの「歴史的方法」は、18世紀の「博物学」と19世紀の「歴史学」の結節点に位置づけることが可能である<sup>5</sup>。

その一方で、コントの「社会学」は、ある時代に支配的な自然科学が提示する知識に基づ

いて、社会の未来を展望することの危険性を物語っている。そのことを如実に示しているのが、ギランが検討しているように（Guillin 2009）、コントの「生物学的」な性差別主義である。第 50 講で論じられるように、「両性の平等なるもの」は「革命家の空想的演説」に他ならないと断じたコントは、彼が「健全な生物哲学」——「女性」とは、それによれば、男性の「幼児状態がいわば継続している状態」である——と呼ぶものに基づき、「女性」は「男性」に従属しなければならないと断言した（Comte 1839=1975: 186）。また、カンギレムが看破したように（Canguilhem 2019: 171-5）、コントの「歴史」は、それを「発達」と同一視している以上、ある生物が、それが「正常」とされる個体であれば、幼体から成体になるのと同じ意味で、非歴史的である。彼の「社会学」が示そうとしたのは、人類の「定型発達」モデルなのだ。動植物のみならず、人間を、ひいては歴史さえも、カテゴリカルに把握しようとする「分類理性」は、自身が作り出した「分類」が「現実的關係」を反映していると確信するや否や、人間を「自然の秩序」と称する檻に閉じ込めることになる。

## 注

- 1 引用文中の亀甲括弧は、著者による補足説明である。
- 2 この記述は、コントの « positif » 概念の特異性を理解する上で、極めて重要な点である。コント研究者のメアリー・ピッカリングが整理しているように（Pickering 2011）、1844 年の『実証精神論』の中で、コントは « positif » に 6 つの意味を与えている。(1) « réel », (2) « utile », (3) « certain », (4) « précis », (5) « organique », (6) « relatif » である。これらはすべて、科学のインターナルな性質についての記述であると考えられる。それに対して、当該箇所が示唆しているのは、ある学説が学派を形成する力を持つかどうかという、科学のエクスターナルな性質であると言えるだろう。この重要な点については、稿を改めて論じるが、一言で言えば、コントにとってある学説が「実証的」であるかどうかを分けるのは、それが人々を「分散」(diverger) させずに「収斂」(converger) させるかどうかにかかっているのだ。
- 3 強調は著者による。
- 4 コントを理解する上で最重要概念の一つである « développement » は、包まれているもの=折り込まれているものを「広げる=展開する」ことを原義とするが、ここでは、生まれたばかりの生物個体においては、当初は鈍麻 (engourdissement; torpeur) の状態にある器官を適切に行使することで、その働きを活性化させること、換言すれば、その器官が持つ潜在能力を十二分に発揮させることを意味する。
- 5 それゆえ、本論文はコント「社会学」の旧弊性と呼びうる一側面を論じたものである。しかしながら、コント「社会学」は極めて複雑な構築物であり、その全体を単に「古典主義時代のエピステーメー」に属する過去の遺物と片付けることはできない。コント「社会学」の独創性については、稿を改めて論じるつもりである。

## 文献

- Appel, Toby A., 1980, "Henri de Blainville and the Animal Series: A Nineteenth-Century Chain of Being," *Journal of the History of Biology*, 13(2): 291-319.
- Bourdeau, Michel, 2020, "Présentation: L'opuscule fondamental," Auguste Comte, *Plan des travaux scientifiques nécessaires pour réorganiser la société*, édition établie et présentée par Michel Bourdeau, Paris: Hermann, 7-29.

- Candolle, Augustin-Pyramus de, 1813, *Théorie élémentaire de la botanique ou exposition des principes de la classification naturelle et de l'art de décrire et d'étudier les végétaux*, Paris: Déterville.
- Canguilhem, Georges, 2019, “IV. Histoire et embryologie: le progrès en tant que développement, selon Auguste Comte,” in *Œuvres complètes*, tome III, *Écrits d'histoire des sciences et d'épistémologie*, textes présentés et annotés par Camille Limoges, 171–5.
- Comte, Auguste, 1970, *Écrits de jeunesse*, textes établis et présentés par Paulo E. de Berredo Carneiro et Pierre Arnaud, Paris: Mouton.
- , 1975, *Physique sociale. Cours de Philosophie Positive*, II, leçon 46 à 60, présentation et notes par Jean-Paul Enthoven, Paris: Hermann.
- , 1998, *Cours de Philosophie Positive*, I, leçon 1 à 45, Michel Serres, François Dagoguet, Allal Sinaceur, nouvelle édition, revue et corrigée, Paris: Hermann.
- , 2020, *Plan des travaux scientifiques nécessaires pour réorganiser la société*, édition établie et présentée par Michel Bourdeau, Paris: Hermann.
- Condorcet, Jean-Antoine-Nicolas de Caritat marquis de, 1794, *Esquisse d'un tableau historique des progrès de l'esprit humain*, Paris: Agasse. (渡邊誠訳, 1951, 『人間精神進歩史』岩波書店.)
- Daudin, Henri, 1983, *De Linné à Lamarck. Méthodes de la classification (1740-1790)*, Paris: Éditions des Archives contemporaines.
- Drouin, Jean-Marc, 1994, “Classification des sciences et classification des plantes chez Augustin-Pyramus de Candolle,” *Revue de synthèse*, 115(1-2): 149–165.
- Durkheim, Émile, 1914, “Le Dualisme de la nature humaine et ses conditions sociales», in Émile Durkheim, 1970, *La Science sociale et l'action*, J-C Filloux, éd., Paris: PUF, 314–32. (佐々木交賢・中嶋明勲訳, 1988, 「人間性の二元性とその社会的諸条件」『社会科学と行動』恒星社厚生閣, 250–63.)
- , 1985, *Les Règles de la méthode sociologique*, Paris: Félix Alcan. (菊谷和宏訳, 2018, 『社会学的方法の規準』講談社.)
- Foucault, Michel, 1966, *Les mots et les choses: Une archéologie des sciences humaines*, Paris: Gallimard. (渡辺一民・佐々木明訳, 1974, 『言葉と物——人文科学の考古学』新潮社.)
- Guillin, Vincent, 2009, *Auguste Comte and John Stuart Mill on Sexual Equality: Historical, Methodological and Philosophical Issues*, Leiden: Brill.
- Gouhier, Henri, 1933, *La Jeunesse d'Auguste Comte et la formation du positivisme*, tome 1, Paris: Vrin.
- Lessertisseur, J, et F. K. Jouffroy, 1979, “L'Idée de série chez Blainville » *Revue d'histoire des sciences*, 32(1): 25–42.
- Macherey, Pierre, 2004, “Comte dans la querelle des anciens et des modernes: la critique de la perfectibilité,” Bertrand Binoche et Saverio Ansaldi dir., *L'Homme perfectible*, Paris: Champ vallon, 274–292.

- , 2013, “Chapitre X. Le jeune comte, critique de Condorcet,” *Études de philosophie française*: *De Sieyès à Barni*, Paris: Éditions de la Sorbonne, 233–248.
- Muglioni, Jacques, 1995, *Auguste Comte: un philosophe pour notre temps*. Paris: Éditions Kimé, 121–132.
- Petit, Annie, 1989, “Condorcet ‘médité’ par Auguste Comte,” Pierre Crépel et Christian Gilain dir., *Condorcet, mathématicien, économiste, philosophe, homme politique*, Paris: Minerve, 480–495.
- Pickering, Mary, 1993, *Auguste Comte, An Intellectual Biography*, volume I, Cambridge Mass.: Cambridge University Press.
- , 2011, “Le positivisme philosophique: Auguste Comte,” *Revue interdisciplinaire d’études juridiques*, 67: 49–67.
- Tort, Patrick, 1989, *La Raison classificatoire*, Paris: Aubier.
- Tresch, John, 2010, “The Order of the Prophets: Series in Early French Social Science and Socialism,” *History of Science*, 48(3-4): 315–42.
- 北垣徹, 2011, 「コンドルセからコントへ——啓蒙の転換」富永茂樹編『啓蒙の運命』名古屋大学出版会, 282–316.

(ひらい まさひと、東京大学総合文化研究科、s08679mh@gmail.com)

(査読者 北垣徹、白鳥義彦)

## **Auguste Comte’s “Historical Method”: From “Natural Classification” to “Social Class”**

*HIRAI, Masahito*

This paper elucidates the “historical method” that Auguste Comte, known as the founder of sociology, explicitly presented as a method unique to sociology. It does so by focusing on its relation to the “natural method” invented by 18th-century naturalists. Comte sought to surpass the *Sketch for a Historical Picture of the Progress of the Human Mind*, composed by Nicolas de Condorcet whom he positioned as his “precursor.” Criticizing Condorcet for ignoring the “natural method” elaborated by naturalists, Comte believed that this fundamental idea should also be applied to “social phenomena.” The result was the “historical method,” and by applying it, he derived the “social series”—analogous to the “animal series” constructed by zoologists using the “natural method.” Comte’s “historical method” is a product of the “classificatory reason” dominant until the 18th century. The danger of fully implementing this principle is evident in Comte’s sexism.